
夏の軌跡

雨宮慶介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の軌跡

【Nコード】

N8955J

【作者名】

雨宮慶介

【あらすじ】

中学時代に、剛腕投手として名を馳せた拓海だったが、最後の大会で効き腕の肱を壊し、ひっそりと野球を離れた。あの夏から、一年。高校生になった拓海は、家でボーとしている日々だった・

ブローグ

熱い真夏の日差しを避けるがごとく、僕は部屋の隅っこで横たわっていた。

扇風機の横に、だらしなく肢体を畳に放り投げ、意味もなくボーと天井を見続けていた。

そんな怠惰な僕の様子を見て、妹の佐智子は「お兄ちゃんは大変だね」だと言う。

確かに寝っ転がっている僕に良くあてはまる言葉だ。でも、決してやることなく、暇って事ではない。

さっき、自分の携帯が鳴った。相手は、小学以来の悪友の将だった。その将が「江ノ島の海に泳ぎに行かない？」と誘ってきたのだ。

でも、僕は気が進まなかった。わざわざ、人が一杯でイモ洗いのような海に泳ぎに行かなかった。

「悪い。断るわ」

そう、簡単に言うと、将は「聞いて驚くな！あの秋月さんも一緒なんだ。秋月さんと海に行くチャンスをお前は逃すのか？」と言う。

「ふん」将の意図とは裏腹に僕は軽く流した。きっと、将は秋月さんの友達を上手くダシに使ったんだろう。それに、クラスで

一番可愛い秋月さんだろうか誰だろうか、はつきり行く気になれなかった。正直、女の子がいるから、尻尾振って行く事自体、馬鹿馬鹿しかった。

「悪い。それでも行かない」

そう言っても、将は食い下がらず、相変わらず、秋月さんの名前を連呼しては必至に僕を躍起にさせようとしたが、無駄な努力だった。

「いけないんで、じゃあな」

僕はそう言い残し、電話を切った。最後まで、将は諦めてなかった。あの、クラス一番の秋月さんの水着が見れる云々としつこく言っていた。きつと向こうでは、「ノリ悪いなあ」って愚痴愚痴と陰口叩かれているに違いない。

一回表「つまらない奴だな」（前書き）

始めて作品を書きます。 幼い文章ですが読んでくだされば幸いです

一回表「つまらない奴だな」

トントントンと黒板に白いチョークでかけられる音、カリカリとシャーペンの音。

誰もいない筈の夏休みの校舎で、ひっそりと補修授業が行われていた。

補修授業は、期末テストで下から一割が対象で行われる。もちろん、残念な対象者は否応なしに強制参加である。

高校受験が終わり、腑抜けになった僕の成績は、デフレのような劇的な急降下を起こした。そして、まったく勉強しなくなった期末テストでは、数学？と国語総合？、そして中学には大の得意科目であった理科…高校では理科総合Aが、一割のラインに低触してしまった。その結果から、残念ながら夏休みの火曜日と水曜日に補講を受けなくちゃいけなくなった。

もともと、隣にいる将に至っては、補修が全科目対象という、ある意味での不名誉なグラントスラムを達成している。だから、補修授業では毎回、コイツに会う事になる。

今日は数学？の補講だった。100点満点のテストでたったの一点をとつての受講だが、とてもじゃないが聞く気にはなれず、なにも書いてない真っ白いノートの上に頬杖を置き、ただ、ボーと窓の外を眺めているだけだった。

グラウンドでは二分して、サッカー部がボールを回している。その横では白い練習ユニホームを着た野球部がノックをしていた。

「おい、拓海」

隣に座っている、将から腕を脇腹に突っ込まれた。 コイツもこいつで授業を真面目に受けてないようだった。

「なんだよ？」

横腹をさすりながら僕は答えた。

「なんで、昨日、行かなかったんだよ」

「え？」

「ほら、海に行こうって誘ったんじゃない？」

僕は思いだした。 確か、昨日誘われていた。

「なんで、断ったんだよ？」

「ああ、ちよつと気が進まなくて…」

「なに言っているんだよ？ あの秋月さんが一緒だったんだよ？」

「悪いなあ。めんどくさかったんだよ。 せつかく用意してもらったのに…」

「ほんとだよ。 まったく、つまんねえ奴だな」

そう言い、将は腕を組み、顔を伏せた。

「なあ、拓海？」

「うん？」

「野球に戻る気ねえの？」

「ねえ」

「本当に？ 肱は大丈夫なんだろ？ 医者は投げてもいいって言っているんだろ？」

「肱は大丈夫になったけど、そんな戻る気はないよ」

「そうか…お前がそう言うなら仕方ねえよ。 でも、お前ほどの投手が投げねえなんて、もったいねえよ…」

そついい残し、将は眠ってしまった。僕は何度か右ひじをさすつた。痛みやかゆくも何ともなかった。

補修授業が終わったのは、お昼前だった。将は、これから野球部の練習に参加すると言い、授業が終わったなりすぐに消えてしまった。

僕は一人、帰る事になった。今日は火曜日だから、母はパートで家にいないから、昼飯の用意はされてない。帰り際、スーパーに寄つて、揚げ物なりお惣菜でなにか買って、家でご飯のお冷を温めて食べよう。そう決めて、昇降口に着いた時、トントんと背中を叩かれた。

振り返ると、秋月さんだった。それも彼女一人だった。

「……」

「……ビツクリした？」

「うん？」

はつきり言えば、秋月さんとは疎遠だった。クラスの可愛い女の子とは思っていたが、それ以上もそれ以下もなかった。だから、こつやつて向こうから背中を叩かれる関係とは思ってなかった。

「まさか、秋月さんとは思わなくて……」

「そつだよね……あんまり、谷口君とは話した事ないよね？」
僕は頷いた。

「……も、もう帰るの？」

「うん、補修授業で来たただけだから」

「え、部活とかないの？」

「ないよ、帰宅部だから」

「え！ 帰宅部なの？ てつきり、谷口君は野球部だと思っていた

よ。だって、何時も相羽君と仲良しで一緒だからさあ」

「相羽とは小学校からの友達なんだ。まあ、相羽は野球部だけだね」

「そうなんだ」

秋月さんはにつこり笑った。笑う時に薄い唇から覗く白い八重歯が可愛かった。

「だったらさあ、谷口君、吹奏楽に入ったら？」

「え…？」

「あ、冗談、冗談。ほら、吹奏楽ってすんごく男子が少ないんだ、だから」

そう言い、また秋月さんは笑った。ただ、その笑顔が、会話が成り立できなくて、ちよつと引き攣っているようにも見えた。

正直、まだ秋月さんがなんで、僕に話しているのかわからなかった。

秋月さんのイメージは、何時も大勢の女子に囲まれていて、滅多に男子とは話さない。ある意味、僕にとってはかなり遠い人間か思ってた。もちろん、彼女の容姿がきれいだの、成績が学年一位みたいなの、そんな評判はちらちらと耳に聞いた事はあるけど、それだけだった。

「あ、私、部活あるから戻るね」

そう彼女は言い残し、廊下に消えた。

家に帰っても、誰もいなかった。不気味なほど、静かだった。

そんな不気味な静かさを打ち消すかのように、僕は「ただいま」と言った。

でも、どの部屋からも返事は返って来ない。当たり前だ。父は仕事に行っている。母はパートだし、妹は塾の夏期講習。だれもこの家にはいない

冷蔵庫に残っていたお冷を電子レンジで温め、買ってきたコロツケを机に広げた。

条件反射的にテレビをつけ、チャンネルを回す。やっているのはどうでもいいような茶番を大々的に取り上げるワイドショーや、恋愛モノの映画。でもいずれも、僕には全く興味がなかった。

そうやって、無作為にチャンネルを回し、一つのチャンネルを止めた。

NHKの高校野球の生中継だった。

多分、第一試合だろうか。ちょうど9回裏だった。スコアは17-15と、本当に野球の試合なのかと思うような乱打戦だった。

実況も実況で「とられたら取り返す。まるでシーソーゲームな展開」と伝えていた。

テレビに映るマウンドには背番号「17」の小柄なピッチャーが立っていた。テロップには「佐々木 洋 一年」と書かれていた。

…一年ピッチャーを出すほど、投手陣の出来が悪かったんだろう…

そう思った。とてもじゃないが、こんな場面で初々しい一年ピッチャーが出る幕ではないと思う。自分だっていくら甲子園と言っても、こんな場面は出たくない。

ノーアウト、満塁。いくら、二点ビハインドとはいえ、長打を打たれたら、同点になるし、最悪は一塁ランナーが還って逆転サヨナラ負け。

それに、帽子のつばから見えるピッチャーの顔は汗だらけで、目が見開いていた。きつと、ものすごいプレッシャーに襲われているんだ。一目見て、わかった。

その１７番のピッチャーがバッターを迎える。バッターもバッターで緊張しているようだった。

そりゃあ、一打打てば同点になるが、最悪ホームゲッツーだったら、今までの行け行けムードは立ち消えになってしまう。

１７番のピッチャーはセットポジションに入った。バッターもバッターで迎え撃つ格好が出来たようだ。

ピッチャーは、キャッチャーのサインに頷く。そして、左足を高々を上げて…

「ストライク」

審判はそうカウントを取った。

ボールはバッターの脇下に行くような、インハイのストレートだった。

…さすがにベンチ入りしただけあるんだな。けっこう攻め入るな…
多分、このバッテリーの頭にゲッツーはないと思った。むしろ、三振を狙いに行くようにも思えた。

次の二球。バッターの膝下の高さで、外に逃げるスライダーだった。金属バットが意味なく空を切っていた。

そんな、バッターの様子を見て、ピッチャーは小さなガッツポーズを見せた。きっと、打ち取れる。そう思ったのだろうか？

そして、三球目。バッテリーの考えでは緩いボールで、次の速球の布石にしようかと思ったのだろうか？アウトローの外れた球のつもりで投げたカーブが甘く、インに寄り過ぎた。

バッターは、あまくなったボールを見逃さなかった。

身体に近づくまで、ぎりぎりまで耐え、甘く入ったカーブを叩く。

綺麗な流し打ちで打たれたボールは一塁線を走る。ホームゲッツーの為に前進守備だったファーストが飛びつくが、あとわずかに届かず、ミットの横を抜けて行った。

結果は、あのライト線の長打による逆転サヨナラ負けだった。

打ったバッターは二塁上でガッツポーズをしていた。その目の前で、打たれた１７番のピッチャーはマウンドで崩れていた。

「一回表「つまんねえ奴だな」 - ?

「かわいそうだったよね？ あの一年生のピッチャー」

初めて話したあの日の翌日も昇降口で秋月さんに会った。誰もいないと思っていたのに、驚かすように僕の背後に忍び込み肩をたたく。僕が振り返ると、彼女はお茶目に笑って「谷口君」と言う。

そして、始まる取り留めもない会話。その会話で、高校野球の話が出た。

「あ、うん？」

きつと、家で見た乱打戦の試合の事だと思った。一年ピッチャーが打たれて、サヨナラ逆転負けした試合だ。

「確かに、あそこはエースや3年生が投げるべきだと思う。1年生があんなプレッシャーを撥ね退けられるわけないじゃん」

「だよね〜 でも、惜しかったよね。最初のストレートはものすごく速くて、次に投げたスライダーも切れが凄くて…」

彼女は歯切れよくそう言った。

「そうだね。最初の二球が良かった分、三球目の甘い球は悔しいだろうな。ねえ、秋月さんは何で、そんなに野球詳しいの？」

そう、さつきから思っていた事だった。「スライダー」とか「切れ」とか女の子の秋月さんは何で、そんな言葉を知っていて使えるのだろうか？　それも、元シニアの僕と話しても何も違和感がない。

「あ、うん。　実は、私のお兄さんが野球やっつけていてね。　で、お兄さんは物凄く野球好きで、リトルの練習終わっても、私を無理やり近くの公園に連れてってはキャッチボールされたの。ヘトヘトになっても家に帰っても、野球中継のテレビにかじりついては、自分なりの実況をするのよ。」

彼女は僕の目を見て笑った。

「ちよつと、引くよね？　女の子が野球の事をペラペラ言うのは……」

「そんな事はないよ　でも意外だったのは本当だったよ。　秋月さんはむしろピアノとかヴァイオリンとかやってそうだから」

「それはないよ。　ピアノはともかく、ヴァイオリンを習える程、私はお嬢様じゃないよ。　普通の一家の娘だよ」

秋月さんは啞然としている僕を見て、苦笑した。

補修は、それからしばらく続いた。　相変わらず、僕はボーとしていて、蕃昌する先生の声を聞き流していたし、隣の将は寝ているばかりだった。　まったく言っていないほど、授業には臨んでなかった。

そんな退屈な補修が終わると、必ずといっていいほど昇降口で秋月さんに会っていた。　そして、取り留めもない世話をちょこちょことする。　今日見たニュースや、出来事。　秋月さんが入ってい

る吹奏楽の事。

最終日になった今日も秋月さんと昇降口で会った。その日は高校の駅前のカレー屋の話になった。僕はその店に一度も行った事はなかったけど、秋月さんは何度も行っているみたいだった。

秋月さんがいうには、そのカレー屋さんは、地元のタウンページは元より、全国ネットのテレビでも紹介された有名店らしい。サラダとかサイドメニューは一切なく、メニューは全部カレーという専門店。…で、辛さの度合いが5段階で選ばれるみたいで、5の辛さは異常みたいらしい。

そんな食い物の話をしていると、僕の腹がすき出してきた。ただでさえ、昼時に近いのに、こんな話をされたら、今にも腹の奥から音が…出てしまった。しかも、かなりの大音量で…

「あ…うん…」

僕はなんとも言い難い声を出した。そんな僕の様子を見てなのか、秋月さんはクスツと笑った。

「お腹すいたの？」

「そうみたい。だって、さっきから食べ物の話ばかりだし…」

苦笑いして、そう答える。

「そうだね。そう、よかったら、そのカレー屋さんに行ってみない」

「え？」

「だって、一度も行っていないんでしょ？ あそこは美味しいし、絶

対に行くべきよ。それに、谷口君、お腹すいているでしょ?」
彼女は笑って、そう僕に言い放った。

彼女の案内で、僕はそのカレー屋さんに着いた。

着いた時には、一時半を過ぎて昼時を過ぎていて、店の中も客も疎らだった。待たされずに奥のテーブルに案内された。

席に着いたなり、メニューを見ずに秋月さんは「いつものBで辛さは2」と店員に言った。

店員は、僕の方に向けて注文を聞こうとする。慌てて、メニューを開いて、最初に目をついた「カツカレー」を頼んだ。

「辛さはどうしますか?」

「ええと4で…」

僕はそう言ったが、横にいた秋月さんは「え? 4? やめた方がいいよ?」と口を挟んできた。

でも、僕はそのまま「4」で注文した。凄くと言うほどではないけど、辛いモノは、好きだった。

店員は注文を繰り返し、僕たちが頷くとレジに戻った。

「ねえ、秋月さん?」

「うん?」

「秋月さんがたのんだ、いつものBって何?」

「あ、あれね。日替わりで中に入っている具材が違っただよ」
「へえ…」

「谷口君は4頼んだけど、大丈夫？」

「大丈夫よ。一応、辛いモノには目がないし、それに、本当は5を頼みたかったところだよ」

「そう？ 後悔しても知らないからね。ここの辛さは異常なんだから」

しばらく僕は周りを見渡した。カレー屋さんの内部は演出の為なのか、少し薄暗くなっていた。向かいに座っている秋月さんの表情もうつすら影っていた。

「谷口君って中学時代、もの凄いピッチャーだったんでしょ？」

「あゝ 一応、中学まではね」

僕は自嘲気味に言った。今は、投げられるのかどうかすら知らない。

「ふゝん。なんで、高校で野球部に入らないの？」

「…いや、実は右の脇を壊しちゃって…」

「あ、そうだったんだ……ごめんね。気を悪くしちゃった？」

彼女はそう言い、俯いてしまった。

「そんな事はないよ。大丈夫だよ。今は治っているんだ。だから投げられるんだけど、でも、再び壊すのが怖いんだ。」

「…そうだよね…」

それから、しばらく黙ってしまった。僕は目の行き場を、天井で回っている扇風機や周りの様子に向けた。そして、盗み見るように秋月さんの様子を見る。

一瞬、秋月さんと目が会う。固唾をのみこむまでお互いの視線は合い続け、ふと彼女は笑った。

「どうしたの？」

彼女が聞く。

「あ、うん。 ちょっとね」

僕はうやうやしていた。 さつきからずっと思っていた事があるんだけど、言えずじまいだった。

「なんか言いたい事でも、あるの？」

「うん。 なんで、秋月さんとこんなに仲良くなったんだろうね？
って思っていて… だって、ほら、夏休みに入る前までは、そんなに話さなかったじゃん」

「うん。 じゃあ、私が谷口君に興味を持って、近づいたって言えば、納得する？ あ、もちろん、友達として興味があるって事ね」

「うん。 でも、僕の何処に興味があるの？」

「谷口君の過去かな？ 野球をやっていたころの谷口君」

「昔の僕に何の興味が？」

「…秋月 悟って知っている？ 茅ヶ崎バスターズにいたんだけど僕は首を横に振った。 茅ヶ崎バスターズという名前自体は知っていた。 何度か対戦していた相手だった。 でも、そのチームに秋月 悟という人がいたのは知らない。」

「私の兄なんだけど… 本当に知らない？」

「ごめん。 昔の記憶だし、さすがにバッテリー全員の名前は覚えてないよ」

「そう…」

彼女は胸の前で、両手を組み、溜息をついた。

「変な話ね… お兄さんは、谷口君を打とうと必死に練習していたのに、谷口君はお兄さんの事をおぼえてないなんて…」

「…」

僕は黙ってしまった。 彼女に対して、なんて言えばいいのかわからなかった。

「…ごめんね。 こんな話をしちゃって…」

彼女は俯いて、そう言った。 店の中はうす暗かったから、彼女の表情はわからなかった。

僕も僕で、黙り込んでしまった。 この気まずい空気を打開する、気の効いた言葉の一つも浮かばなかった。

そんな時に、温かいカレーが運ばれてきた。 物凄く辛いカレーが、僕の目の前に置かれた。

1 回表「つまねえ奴だな」ー？

「だから、止めた方が良いつて言っただじゃん」

5 杯目のお冷を飲み干した時に、秋月さんは悪戯な目線で笑っていた。

辛いモノは大丈夫だと高をくくっていたら、案外辛かった。口の中が火傷したみたいにヒ―ヒ―し、我慢できずに何杯もお冷を飲み干した。

「もつと飲む？」

僕は頷いた。彼女はポットをもち、コップ一杯に水を注いだ。

「まさか、こんなに辛いモノだとはおもわなかったよ」

「でしょう？ どの位なのか知らないのに、いきなり4を頼むんだから」

「確かに迂闊だったよ。3にすればよかったよ」

「まるで、谷口君は中学生みたいだね。」

秋月さんはクスツと笑う。

「なんで？」

「だって、見栄張って辛いカレー頼むんだもん。中学生の時って、ワサビつけて食べれるとかインスタントカレーの辛さで妙に我慢してなかった？ ほら、回転寿司で、ワサビ抜きを注文しなくてもいいって皆に自慢したりしなかった？ 自分の丈に合わないのに妙に大人になりたがってたさあ」

「それって僕が子供って言いたいのか？」

「うん。そうだよ。でも、そんなところが可愛かったりするよ」
また、クスツと笑う。その笑顔は、まるで、可愛い弟の面倒をみるお姉さん見たいだった。

「ふうん そしたら、秋月さんは大人っぽい人だね。 頭もいいし、性格も良いし、なんか話し方が大人っぽいし…」

「…でも、大人っぽいってみんな言うけど、自分ではそう思わないなあ…」

「え、なんで？」

「だって、私、ワサビはだめなんだもん」

補修最終日だったその日から、夏休みが終わるまで間、部活にはいない僕は学校に行かなくなった。 補修が終わった以上、僕が学校に行く理由が無くなった。 もちろん、秋月さんにも将にも会っていない。

そして、日々、怠惰な生活を送るうちに、ただ悪戯に時間が過ぎ、夏休みは明けて行った

夏休みが明け、初日。 一カ月半ぶりに見るみんなの顔は変わっていた。

日焼けした顔や、茶色に染まった髪、思いっきり髪型を変えたりして、イメチェンを図った者、そして、将みたいな大して変わらん奴。

そんなクラスの皆は想い想いに満喫した夏休みの話をしていた。 隣のお嬢様学校の生徒と合コンしたりとか、海に行ったりとか、花火大会に行ったとか…

「おい、谷口。 聞いているのかあ？」

右隣に座っている川淵が聞く。 彼の顔は、日焼けしたみたいで顔が真っ黒だった。

「あん？」

「あん？じゃねえよ。さっきから、お前、上の空だし…」

「ああ、ちゃんと聞いているよ」

「そつだ、そつだ。さっきから、川淵っていうサッカー部の奴が一方的に、話しこんでいたなあ」

「なんだっけ。隣の高校の女子で海に行ったとかそんな事だったよな。そんなどうでもいいような事だったな。」

「全くお前は… 谷口はどっかに遊びに行ったりしてねえのか？」

「学校の補修以外、何処にも行ってねえよ」

「おいおい、マジかよ。相変わらず、しけてるなあ、谷口の夏休みは」

「川淵が半泣きして笑っていた。何が面白くて笑っているのか僕には理解できなかった。」

「そんなようだと、彼女の一人もつくれないよ」

「川淵は薄笑いをした。まあ、もっとも、こいつはモテるしスタイルもいい。しかも、何故かそこそこ可愛い彼女もいる。そんな甘いマスクで女の子には受けが良いかも知れんが、男の僕にとってはつきり言っただけ嫌いだ。正直、この半スケべなじゃや馬では合わないと思う。なのに、こいつは会えば、引つ切り無しに僕に話してくる。」

「まったく、お前、顔はいいのに、そんな態度じゃあ」

「彼は何か言いかけたが、何を言っただか覚えてなかった。」

「聞き流していて、僕はまたクラスの様子を見た。机五つ向こうでは、女子が集まっていた。その中に秋月さんの姿が見えた。」

「最後に見た彼女と違い、肩まで髪をバッサリ切ってしまったようだ。」

「でも、僕と秋月さんの関係は相変わらずだった。7月の終業式以来、僕たちの関係は全く変わってないように感じた。」

夏休みの補修の帰り、昇降口で毎日、二人つきりで話していたけど、それも、きつと嘘だろうと思うぐらいだった。

夏休み前となんら変わらない距離感と関係だった。

また、将の付き合いが夏休み中盤から、少しばかり悪くなった。

将はシニアの時、僕と同じチームに入っていた。僕が投の要だとするならば、将は、打や守の要だった。将を多くのスカウトは「天才的なバッター」と評し、諸手を挙げて彼を母校に入れようとした。その中には、東京の帝荇や神奈川の栄大藤沢という古豪、また九州の雄とも言われた、鹿児島島の薩摩実業も誘われた。

シニアの監督やコーチ・チームメイトといった周りの人間は、もっぱら、将が何処に行くのかが話題だった。地元の栄大藤沢に行くという、当てもない噂すら流れた。

どちらにしろ、将はどっかの強豪に行くのは当たり前だと思われた。

でも、周りの期待や興味の目を反して、奴はすべて断った。そして、普通に高校受験をし、無名校と言われる公立の此処に来た。

「野球して飯を食っていけるのは一握りのみ。どうせ、俺の能力じゃあ、食っていける稼げねえ気がする」と奴は言うけど、野球を除くと、なんにも残らないような将がこう言うとは思わなかった。

そんな将は、この秋季大会から、三番サードとしてスタメンに選ばれている。彼の實力なら、ベンチに座らせるのはオカシイし、当たり前前の結果だった。でも、そのためにみっちり練習が詰め込ま

れた。夏休み初めには、しつこいぐらいに毎日引つ切り無しにくる
将からの遊びの誘いも、終盤になれば嘘のようにまったく来なくな
った。

「全く、身体が持たないよー マジでー」

昼休み、グラウンド整備から返ってきた将は開口一番、僕にそう言
った。

「はあー 眠いよー」

「将。お前は何時も眠たそうだよ。授業中だって、何時も大き
な欠伸ばっかりしているじゃん？」

「いやいや、今日は特別眠いんだよ。疲れているしー」

「じゃあ、今日も睡眠学習？」

「そう…じゃあ、お休み」

そう言い、将は机の上で伏した。次の授業は寝る気満々らしい…

僕も昔、将みたいな野球バカだった。シニアの時、将と二人で頑
張って、日が落ちても最後までグラウンドに残っていた。

僕がピッチャーで将がバッター。

僕が思いっきり投げて、将が遠くまで打つ。

僕が限界まで投げ、将は手の握力がなくなるまでバットを振る。

でも、今は違う。将はバットを持っているけど、僕はボールを握
るのを止めた。

僕はもうマウンドから降りたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8955j/>

夏の軌跡

2010年10月28日06時34分発行